

勝林寺寺報

キミヨウムリヨウ

昔、といつても、そんなに遠い昔ではあります。昭和三十年ころまでは、夕刻、村なかをあるくと、あちこちの家から「キミヨウムリヨ」のおつとめの声が聞こえて来ました。

キミヨウムリヨウとは親鸞さまの著書『教行信証』のなかにある『正信念仏偈』という百二十句のうたです。略して「正信偈」と云われています。

この「正信偈」に「和讃」を添えて読むようすすめたのは、本願寺第八代門主「蓮如上人」という方ですが、この蓮如さまのことばに、「ほかの」宗旨では、おつとめをしてその功德をほとけさまやご祖先さまへお供えしに向すると聞きますが、親鸞さまのご宗旨では、決してそうではありません。如来様からのお喚び声のおこころを、よくよく聞きとれよと親鸞さまは願われて、お念佛のこころを伝えて下さった「七人の高僧」の懇ろな解説を百二十句の歌にし、其のうえに、ほとけさまを讀える和讃も添えて、如来さまの願いが聞こえてくるようにと、親鸞さまがおつくりくださったこの「おつとめ」を稱え、「ああ有り難いことよ」と、聖人の前でよろこびお念佛申すことが大切なですよ」と、繰り返し繰り返しおっしゃいました。

(「蓮如上人御一代記聞き書き」)

帰命印無量度身如來

「帰命印」。今でも通用するインドのことばです。ナマス。音をそのまま写して「南無」。意味は、「あなたに寄りかかり」、「あなたにおまかせします」。帰依・帰命と中国では訳しました。何に、どうお任せするのか。「不可思議なひかり」「限りないのちのほとけさま」

浄土真宗の信仰対象です。

まず「不可思議」。人間の思考・かんえの否定です。

「人間は考える葦」。「考える故にわれあり」というのが近代文明の基盤です。がしかしそのような傲慢な文化文明は現代破綻しつつあります。

謙虚に私自身を顧みるとき、わたしの「思

議」は、いかに、狭い我が身勝手な利己的な

独善的なうす汚いものであるか。俗な云い方

だが「ソロバン勘定」ばかりではないのか。

善意での奉仕のときさえ、実は蓮如さまが

指摘する「まいらせごころ」(あの人にこれ

をしてあげるのだ)。結果「してあげている

ノニ」と嘆悲・愚痴。

「不可思議」。そんな人間くさい思いの全

面否定。わたしのそのような愚痴な罪業を

照らし出し、しかも煩惱罪業の凡夫を見抜

いたうえで、しかもその罪業の凡夫を暖かく

照らす母ののような智慧の光り。それを「不

思議光如来」と仰ぐのです。

「無量寿」。いつでも、どこでも、なにも

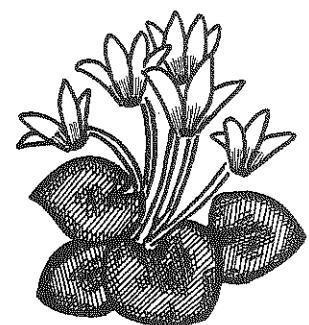
のでも。願い続け。そしてそのものの生き抜

くいのちの種とはたらく父親のような慈悲の

ひかりが「無量の命」尽きない慈悲のちから

が「無量寺」です。

報恩講にお参りください



報恩講にお参りください

講師 吉澤教範師

日時 十一月二十一日（木曜日）

*一日日夜の送迎バスはありません。

お参りください。

午後五時半 お齋（食事）始まり

*都合の良い時刻に

おいでください

六時半 ご伝説

七時半 お勤め

法話

九時半 終了予定

十一月二十二日（金曜日）

*送迎バスを差し向けてます。ご利用ください。（詳細は別紙）

午前十時 お勤め

法話

二一日（木）報恩講

三三日（土）山田美佐子宅 七回忌法要

三四日（日）正法寺 報恩講 総仏講

二六日（火）正法寺 報恩講

二六日（火）みのりを開く会

二七日（水）佐田・奥栗尾 報恩講

二八日（木）口栗尾 報恩講

二九日（金）保谷・日殿 報恩講

三〇日（土）森友敏裕宅 三回忌法要

（敬称略）

これが淨土真宗のご本尊。蓮如さまは、眞実・真如は固然とした冷たいものではない。親の眞実はいつでもどこでも、むしろ罪業深重なもの。うえにこそはたらいで止むことのないもの。具体的には如來の眞実は南無阿彌陀仏の念佛となつて、わたしに働き続けていて下さる。

「如來」。タッターハ。【如ヨリ来生ス】。

「他流二ハ」名号ヨリハ絵像。絵像ヨリハ木像」と云うなり。当流（淨土真宗）には『木像よりは絵像、絵像ヨリハ名号』というなり。

淨土真宗は偶像崇拜ではない。

無限のむかしからこの今まで、現にこの私のうえにはたらいてくださる無量の光りといふのちきわみなき「南無阿彌陀仏の如來さま」なのです。

一一月 勝林寺 予定

二日（土）岡野 隆宅 一七回忌法要

三日（日）光顕寺 報恩講

四日（月）山田紀夫宅 七回忌法要

六日（水）出石組門徒推進員研修

七日（木）龍野 浄蓮寺 忌明法要

八日（金）正福寺 報恩講

九日（土）正福寺 前住一七回忌法要

九日（土）前坊守三回忌法要

九日（土）本覺寺 報恩講

一〇日（日）山田博文宅 三三回忌法湯

一四日（金）福成寺 報恩講

一六日（土）高福寺 報恩講

一六日（土）おみがき清掃奉仕作業

一六日（土）



智慧の光明はかりなし
有量の諸相ことごとく
光暁かふらぬものはない

真実明に帰命せよ

「淨土和讃」のうち冒頭の四十八首は『讃阿弥陀仏偈和讃』といつて墨鸞さまという方がうたわれた阿弥陀さまの贊歌に依つてうたわれた和讃、その第二首目です。

この和讃には、「左訓」といって難語にはその左がわにカタカナでその言葉の意味が示してあります。

先ず「有量の諸相」には「世間ニアルコトハミナ量リアルニヨリテ有量トイウ」「仏法ハキワホトリナキニヨリテ無量トイウナリ」。私たちの世界とほとけさまの世界を対比して見せます。

わたしたちの世界は、すべて、多いとか少ないとか。高い低い、多い少ない。值打ちがある無い。などなど。比較し競争し、また時には人を踏みつけ撥ねのけ、差別して自分を高ぶる。わたしの利益をなによりも優先する。「我吏我利亡者」。「貪・嗔・癡・慢・癡」（根本煩惱）といって、ちっぽけな狭い「自分の眼」でしかものが見えない。現代の言葉で云えば「自己中」。それがほかならぬ「わたし」です。

その私の姿は自分ではなかなか見えない。見ようとはしない。

「闇」は夜明けの光り（無碍光仏の光り）に出会ったときはじめて闇の深さに気づく。親の慈悲に出会ってわたしの不孝の罪に気づく。

真実明。「真トイウハ偽リ詔（シラハヌナリ）。」。わたしの小賢しい偽りやごまかしのきかない。如来さまはすべてお見通し。

「實トイウハ必ズモノノミ（實）トナル」。わたしの命の核（ささえ）になつてくださる。

生きるモチベーションがうまれる。わたしたちの如来さまは「智慧」のほとけさま。ほとけさまの智慧とは。

「智は、アレハアレコレハコレト分別シテ

思イ計ラウニヨリテ思惟ニナヅク。恵ハコノ
不動ニナヅク。不動三昧ナリ。」（左訓）

この私を救うため五劫のあいだあれこれ考え続け、呼びつづけるよりほかなしと本願名号で念じづけ呼びとおしている不可思議光。その道しか外にはありません。

如來に帰命しようではないか。と親鸞様は誘つて下さるのです。

「帰命」とはインドのことばでナマース（南無）「あなたに依りかかる」。お任せ致しま

す。お念仏は不吉な、また、悲しい時だけのものであるというような誤解や先入観があるようです。また、普段は無宗教を標榜している人でも、自分の希望、目標、欲望をかなえるために、お念仏を一時借用して仏様にお願いする言葉になっています。ところが、才市さんは、うれしいときにお念仏を称えられます。「」思 ure や なむあみだぶつ」と。このお恩とは何でしょうか。ご先祖の恩、師の恩、自然の恩とたくさんあります。才市さんは、阿弥陀如来のご恩をよろこんでいるのです。聴聞を重ね自分がすべてが智慧の光明に照らされた才市さんは、「あさまし」と詠んでいます。このようないい「あさまし」ものを見捨てずに必ず仏にせずにはおかないと、阿弥陀如来のお慈悲の心が至り届いたとき、喜びのお念仏を称えずにはおれなかつたのです。（後略）

（何も芸がないので、歌う」としか思いつきませんでした）曲目は「津軽海峡冬景色」。歌詞を暗記して、精一杯のジェスチャーもつけての熱唱でした。しかし、今思えば、年季の入った芸や、変装を凝らした出し物の中で、ただ真面目で真剣なだけの私の歌は、少々その場の雰囲気からは浮いていたかもしれません。にもかかわらず、歌い終わつた私の足元に、ずっと笑顔で手拍子をしてくださつた一人のおじいちゃんから「おひねり」が投げられたのです。その人こそ「倉治おじいちゃん」でしたね。おひねりは、私のこわばつた顔を一瞬で笑顔にしてくれました。（お金がうれしかつただけではありませんよ！）会場の雰囲気をふわっと温かくしてくれました。

私の敬老報恩講デビューを、とても心に残る心地よい時間にしてくれました。

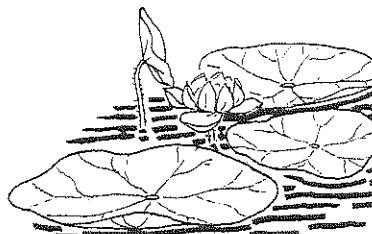
あれから二十五年。今では舞台に立つことに喜びを感じ、すっかり勝林寺になじんでいられる私です。（笑）倉治おじいちゃんのおひねりのおかげです。

どすん

倉治おじいちゃんへ
お淨土にお参りされてからず
いぶん久しくなりました。でも、
私はおじいちゃんの粹な計らいの事を思い出していますよ。

敬老報恩講を迎えるたびに、私はおじいちゃんの粹な計らいの事を思い出していますよ。

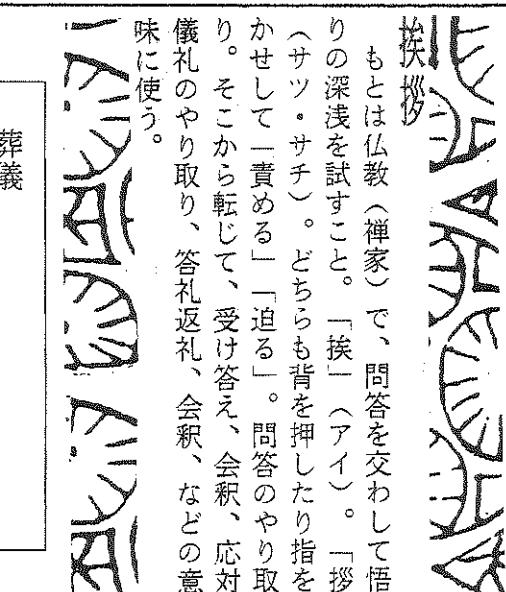
慈悲に照らされ 南無阿弥陀仏



法話カレンダー

出典浅原才市(山陰 妙好人のことば)

Though I may forget, I am always illuminated by the Great Compassion of Namo Amida Butsu.



葬儀

（前略）才市さんは、六四歳から聞法の音び

の詩をノートに記録し始め、生涯約四〇〇首の詩を残しています。その詩の中で数多く出てくる言葉が「」思 ure や なむ

平成二十五年十月二十三日

出合 関森 松一様 九十四歳

（文責 坊守）